

## 国際コミュニケーション学

齊藤真子・藤田高弘  
岡村明・野田真里\*

**【抄録】** 日本・韓国・英米の各文化における共通性と異質性を理解し、擬似体験することによって、国際コミュニケーションの意味を知識と体験を通して見つめ直し学び合うことにより、多文化コミュニケーションの重要性や必要性に気づき、文化共生に対する感性と寛容性を高め、文化や文明間に存在する諸問題に対して柔軟に行動できる力を育成する授業の取り組みである。

**【キーワード】** 気づき 感性 行動 擬似体験 多文化共生 コミュニケーション 異文化理解 学び合い

### 1. はじめに

新教科群「国際コミュニケーション学」の講座では、コミュニケーションの意味を知識と体験を通して見つめ直し再認識し、世界の多様な文化の存在に気づき（Awareness）、多様な文化に対する感性（Sensitivity）を高め、文化や文明間に存在する諸問題に対して柔軟に行動（Action）できる力を養い、同時に、自国文化を再認識するという目的を設定した。このような目的を達成する為に、以下のような具体的なシラバスを設けた。日本、韓国、英・米を縦軸、言語・表現・生活を横軸に取り（参考・下図）、日本・韓国・英米の各文化における共通性と異質性を理解し、体験することによって、多文化コミュニケーションの重要性や必要性に気づき、多様な文化に対する感性と寛容性を高めるというシラバス案を構築した。次に、本講座の各グループと学習内容のクロス表を提示する。

国際コミュニケーション学 高校2年前期

1つの講座を3名の附属教官、大学教官1名が担当  
＜学習内容と各グループのクロス表例＞

内容グループ	日本のことを探る	コリヤ面白発見	英米文化を探る
言語	日本語の構造	ハングルの構造	英語の構造
生活	日本の年中行事	韓国の食事	英米の儀式
表現	日本の文学	韓国の芸能	英米の文学

このように1講座内の各グループが横軸の言語・生活・表現といった内容を共通のテーマとして設定することによって、グループ間融合や合同授業での共通となる知識や、同質・異質な文化背景への気づきを促進するシ

ラバス構成に配慮した。

さらに、上記のグループ間融合を促進する為に3グループの合同授業をいくつか企画した。その融合学習では、知識と経験のバランスを考慮した学習方法を取り入れるようにした。具体的には、各グループで言語・生活・表現で固有の文化的特色を学んだ後で、留学生を招きそのような特色が普遍的なものなのかを検証する機会を設けた。すなわち、文化的なステレオタイプを確認したり、そのステレオタイプから脱却する仕掛けを用意した。

また、日本からは遠く感じられかつ、現代的なテーマであるイスラム文化を考える機会、美術的なテーマから異文化を理解したり、フィリピンでのNPOの活動家に直接異文化体験を聞く機会も用意した。さらに、各グループと合同学習を踏まえて講座に共通の夏の課題を出し、発表会、討論会を本講座の振り返りと総括を目標にして実施した。

以上の概要を中心に、「新教科群—国際コミュニケーション学」の授業実践と生徒の状況を具体的に報告する。

### 2. 指導の方法

#### (1)対象生徒

高校2年生（116名—38／39／39名の3クラス）

#### (2)実施方法

前期 週1回1時間 0.5単位 全16回  
各クラスを、3テーマで展開

展開人数表（人）

	日本グループ	韓国グループ	英米グループ	計
A組	12	12	14	38
B組	11	14	14	39
C組	12	13	14	39
計	35	39	42	116

\*中部大学助教

## 前期授業実施内容

全体 野田先生	斉藤先生	岡村先生	藤田先生
4月15日(火) 全体説明10分 1展開	オリエンテーション 斉藤グループの説明 10分 日本のところを探る 希望調査	オリエンテーション 岡村グループの説明 10分 コリア面白発見 希望調査	オリエンテーション 5分全体説明 藤田グループの説明10分 英米の文化を探る 希望調査
4月22日(火) 1展開	コミュニケーション合同ワークショップ(野田先生) * 自己のコミュニケーションスタイルを知る * 言語・非言語によるコミュニケーションを経験する * 体験的異文化教室		
5月6日(火)	ビデオ「おしん」から見える日本	韓国映画からコリア文化を味わおう	英米文化のシンボルとイメージ
5月13日(火) 1展開	「花見」から考える日本の暮らしとところ	韓国の食文化 キムチはなぜ辛い	映画に見るアメリカ文化
5月20日(火)	桜茶 抹茶体験	ハングル入門	米国文化大使との交流
5月27日(火) 1展開	カレントトピック(イスラムから見た世界)特別講義 愛知淑徳大学 星山幸子先生の講義「イスラームと国際コミュニケーション〜ヴェール着用の是非をめぐって」		
6月3日(火)	「ことば」って面白い	韓国語の背景にある考え方	個人主義社会と集団主義社会
6月10日(火)	日・韓・英の言葉比較	クイズ韓国人の生活	愛蘭土文化大使との交流
6月17日(火) 1展開	留学生との合同交流会・発表会or討論 アメリカ、韓国、マレーシアの留学生		
6月24日(火)	源氏物語 徒然草 陰影礼讃	韓国の民族芸能	異文化コミュニケーション論-ステレオタイプ-
7月1日(火)	自然観 テーマ探し	韓国人の行動様式	擬似的カルチャー
7月8日(火) 1展開	愛知県立芸術大学 神田每実先生の講義「光、約23.4度の可能性」 異文化理解の鍵は太陽光と地軸の傾きにあり、地球的な規模で人間の営みを見る視野を身につけることが大切である。		
7月15日(火) 1展開	異文化にとけこむ、異文化を受け入れる —NGO「マハリカミッション」の多文化共生に向けての活動—		
9月2日(火)	夏の課題発表会	夏の課題発表会	夏の課題発表会
9月9日(火)	合同発表会の準備	合同発表会の準備	合同発表会の準備
9月16日(火)	3グループの文化比較・コミュニケーション比較合同発表会 「地球社会で生きるのに大切なコミュニケーションとは何?」		
9月30日(火)	「国際コミュニケーション学」の振り返り(半期の総括) 生徒のアンケート調査		

### 3. 指導目標

#### (1) 齊藤グループ

日本文化を韓国文化や英米文化と比較しながら、日本に住む人々の生活・日本語・文化・表現方法・行動などの背景にある価値観や歴史について再認識し、多文化コミュニケーションの必要性にきづくとともに、多文化共生のあり方を学ぶ。

#### (2) 岡村グループ

韓国の生活・言語・表現面の体験的な学習を通して、その背景にあるものの見方・考え方の違いに気づき、自国の価値観に捕らわれず他国の文化を受容する柔軟な思考力を身につけ実践的なコミュニケーション能力を高める。

#### (3) 藤田グループ

アメリカ、イギリス、アイルランド人特有の生活様式、表現方法、行動のパターン等の背景にある文化特有の価値観に気づき、自国文化である日本文化の価値観と比較しながら、両文化を適切に受容し、具体的なコミュニケーション方略を学ぶことができるようにする。

### 4. 特色ある活動と生徒の取り組みの様子

#### (1) 日本グループ

「日本のここを探ろう」のテーマで生活・日本語・文化・表現について取り上げた。生活では、「NHK朝の連続テレビドラマ「おしん」(1983～1984放送)から見る日本」ということで、少女編2のビデオを視聴した。生活(衣・食・住・身分など)全般の現代との違いと、子守りをしながらでも学校へ行き学ぼうとする健気な少女の姿に生徒達は驚いた。女性差別と貧困の中で必死に生きる「おしん」は、第三世界を中心に59カ国で放映されている作品である。それは日本がいかにして近代化し成功したかという国民的な苦労話だからである。さて「おしん」の時代を現代社会と比較するといろいろなものが見えてくる。と同時に、生徒自身が「おしん像」をどのように受け止めたか、その違いについても話し合った。この授業をきっかけに図書館にあるビデオを借りて全部をみた生徒がいた。

「日本語」の特徴の説明については、基本的な事項の概略にとどめた。英語の言語(文法)構造と日本語とを比較した。中学校における既習事項の復習である。留学体験のある生徒を中心に、次々と英語と日本語との違いの事例があげられて盛り上がった。「日本語」の特徴とよさを再認識した。前期(4月～9月)の授業なので、文化では「桜」を取り上げ日本文化における「桜観の移り変わり」について考察した。桜茶や抹茶体験を楽しみつつ、古典作品の中の桜とその表現についてということで、徒然草・源氏物語・陰影礼讃などを生徒による解説と鑑賞で読んだ。日本人の自然観の推移を「文学」における表

現から探る試みである。この日本人の自然観の授業での話し合いの中から「日本の宗教とは何か」に話題が移り、さまざまな意見が交わされた。星山さんの「イスラームと国際コミュニケーション」のお話の中でのテロとヴェール着用の是非をめぐる討論の後だったからであろうか。予想外のことであった。「日本人の宗教って何か」について、みんなで話し合ったことは、誰もが印象深く感じるもので新鮮なことだったのである。さて、夏休みのレポートで「日本人の宗教観」のテーマを取り上げたAさんは、レポートの「はじめに」で次のように書いている。「日本人には他国の人々と比べて宗教心がないのか?現代の日本では、キリスト教や仏教などを否定しているわけではなく、年中行事などはちゃんと行っているのに、自分は無宗教だと言う人が多い。それはなぜか?もともとキリスト教など、他国から入ってきた宗教の行事(クリスマスなど)を行っているのはなぜか?日本がそのような宗教を受け入れるようになったわけを調べたいと思う。」そして、考察後の「結論」では「これらの資料を見ていると、時代ごとにさまざまな宗教が入ってきたせいで、今のような状態になったように思う。でも、最後の「日本人は宗教に幻滅してしまった」というのは、そうではないと思う。確かに昭和時代に宗教に対して幻滅してしまった人は多くいたと思うけれど、今の私たちは、家族(親)が特に信仰する宗教を持っていなかったから、特に関心を示さなかったのだと思う。自分にあまり関わりのないものに関心を示すのは難しいと思う」とまとめた。続けて「感想」では「宗教の事を調べてみて、なぜ日本にはさまざまな宗教行事があるのか少し分かったような気がした。海外の人には信じられないことかもしれないけれど、こういう環境で育ってきた私たちには当り前のことだった。その普段気に留めていない、クリスマスを祝い、正月には初詣に行ったりする当り前のことを調べてみて、実はよく知らなかった日本人の宗教観の移り変わりなどを知ることが出来てよかったと思う。」であった。Aさんは、人や民族の価値観のベースとなる宗教のあり方にきつき、それらとの比較から、日本人の宗教に対する見方・考え方について考察した。発表会でAさんのレポートは高い相互評価を得たのである。

〔Rくんの振り返りから〕

(1)印象に残ったこと はじめに学んだ「挨拶の違い」は大変興味深かった。何故ならば単なる「挨拶」と思っていたものが、あれほどまでに文化を表すことが分かったからだ。また日本グループであったため「日本のここ」という観点から古典文学を読み直したり、それを通して自分自身の日本人性を見つめなおしたりすることができて、なんとも素晴らしい体験が出来たと嬉しく思う。その他「興味関心が持ったこと」は枚挙にいとまがないけれども、留学生との交流をきっかけとして日本と外国との文化隔絶と共通性に気付くことが出来たのも実

に良い思い出として残っているし、今後世界に出てゆくことがあれば役に立つであろうと期待もしている。

(2)グループで深く学習し印象に残っていること 「さくら・桜」という誰もが「日本」を思い浮かべるものを通して古の時代から日本人が感じてきた「あはれ」の心、消えてゆくものに情緒を感じる心が自分の中にもあることを再認識した。とはいえ「自分は日本人だ」との考えから国粋へ傾くことは一切なく逆に自らを知ったことで他の文化、意志を考える、または理解するのが容易になったのである。今後国際化が進んでゆく中でひとりひとりが自らのことをよく知り、殊にアイデンティティを失ったとまで言われる日本人は今一度自文化へ目を向けてから、世界と接しなければならない。今回僕が最も重きをおいて考えた「宗教」は日本人と世界との交わりの中で必ずや摩擦となるべきものであり、日本精神を基調として思いを巡らせたことで、より一層日本人と外国文化との隔絶を感じた。しかしその隔たりを取り除くその一助に国際コミュニケーション学が存在するのは間違いなく、今後も「新教科」的立場からものごとを考えていきたい。

(3)自分の問題意識の変化 外国へ行ったり外国のことを勉強したりしてきた中でうまれたさまざまな疑問—何故自分はこのように感じ考えるか。この国の人々の意識は何処からやってきたのか—や新しい興味、それらが自分の頭の中にあつたにせよ、きちんと系統立てて考えることはなかった。その問題を解決したのが今年度の新教科であった。そしてその中で「日本」という眼鏡をかけて世界を眺め、ともに学ぶ者たちの意見に同意したり反対したりしながら自らの考えをさらに発展させられたと思う。発表や討論によっても考えのまとめ方を学べたし、きちんと意見を言いたいために、更なる探究心を発揮できた。日々ニュースや新聞でみることさらにについても「新教科」の学習で見方が変わったような気がする。

(4)学習を進める上での問題点と要望 どうコミュニケーションをとるかという見方のみならず自分の意見を相手に押し付ける時伴う痛みについても話してみたかった。また、韓国文化 英米文化 自文化との枠があったから考えやすかったというところが、その枠から飛び出すには時間が少なかったのかもしれない。

(5)他教科との違い 与えられた問題に必ずしも答えが用意されているわけではない。すべての感覚と感想を用いねば、授業を全うすることができない。

(6)総合人間科との違い 国際コミュニケーション学の方が総人よりもある程度テーマのしぼりが行われている。さらにつきつめて様々な観点から問題をとらえられる。

(7)他に学習しなかったこと もっと宗教について討論しなかった。

(8)その他 実に役にたった。新教科的思考方をこれか

らも持ちつづけたい。

さて、高校二年生の前期の「国際コミュニケーション学」で以上のような振り返りを記したRくんは、高校二年生の後期の「共生と平和の科学」の授業では「貧しさと豊かさ」のグループに入った。その授業の最後で「児童労働世界子ども会議」のことを知り友達と応募をした。

そして合宿で参加者の中から選ばれて「児童労働世界子ども会議」のイタリア会議に参加した。帰国後に東京で行われた発表報告会や学校祭の展示企画「児童労働」などで、イタリアでの経験をみんなに伝えた。

高校三年になったRくんは「僕のこのような取り組みや行動の原点に新教科での授業があります。新教科では、僕が知らなかった分野だけれど、生きていく上で必要なことだし考えていかななくてはいけないことを友達と一緒に学んだ。」と述べている。そして「僕が大学で専攻したいことは別にあるけれど、これからも「子どもを助ける活動」に携わっていきたい。」とも考えている。

Rくんは新教科の授業を、「生きていく上で必要なこと(授業)」と、とらえているのである。

(文責 齊藤真子)

## (2)韓国グループ 「キムチはなぜ辛い」

韓国グループの生活の授業として、食事やその作法を取り上げ、食文化についての理解を深めることにした。韓国の食事は、座って食べたり、箸・スプーン・器などが日本と共通する点が多い反面、作法や使用法の細かな点で随分違っており、実際の食事場面では戸惑ったり、ショックをうけたりすることが多い。この授業では、韓国料理を実際に食べながら、食文化の背景にあるものの見方・考え方の違いに気づかせていくことにした。

### 〔食事の会話について〕

韓国料理を食べる前に、食事時によく使われる韓国語〔いただきます(チャールモッケスムニダ)・ごちそうさま(チャールモッゴスムニダ)・水をください(ムルジュセヨ)・美味しい(マシッソヨ)・辛い(メウオヨ)・お勘定してください(ケサンジュセヨ)を発音するとともに、



その際の仕草についても体験し、日本式の食事のあいさつとの違いを考えさせることにした。

いただきますやごちそうさまについては、日本の場合、仏教の影響により合掌をするが、韓国では、合掌しないことについて触れた。また、この授業を参観していた中国留学生の劉さんに中国式のあいさつについても教えていただいたが、中国の場合は挨拶の言葉や仕草は特に無く、そのまま食事に入るということをうかがい、同じ東アジアの国でも仏教の影響の違いを理解させることができた。

〔食事作法について〕

食事の作法については、韓国の食卓をできるだけ再現するために、丸い机の上に金属の食器・スプーンを並べ、代表生徒にチマチョゴリを着させ、立て膝の座り方で食べてもらった。他の生徒は、作法のポイントの解説を聞きながら、日本との比較を考えさせた。座り方で、女性が立て膝でたべることについては、かなり抵抗感があり、多くの生徒が不作法と受け取ってしまいがちであった。また、年長者が箸をつけるまでは、食べてはいけないという儒教の教えを厳格に守ることに窮屈さを感じていたが日本でもしつけとしてなされる場合も多く、理解させやすいことであった。

しかし、年長者の前で飲酒や喫煙する場合は、横を向くということについては、長幼の序を重んじる韓国の作法に驚き、日本より儒教の教えが色濃く残っていることに気づかせることができた。

代表者が鍋ものを食べる場面では、直箸・直スプーンで取ることが家族や仲間の親しさの表すという考えが背景にある点がわかった。また、お碗を持たずに食べることについては、始めは「犬食いみたい」と言っていたものの、器を持って食べる日本の作法が世界では少数派であり「浅ましい」と受け取られることが分かった。また中国においても、直箸で取るために日本より長い箸を用いることを劉さんに解説していただいた。

食べ残しについては、中国・韓国とも、満腹感の表現として良く、日本のように「せっかく出されたのにもったいない」という感覚とは違う点が理解させることができた。

〔試食について〕

代表者の実演のあと、全員で韓国の味付けとして代表的な唐辛子を使った鍋料理とキムチを食べ、食文化の違いを実体験させることにした。代表者の実演のあととはいえ、実際に生徒が試食すると、お碗を持ってしまったり、箸中心になったりして日本式の食事作法が抜けきらず、韓国の食事作法との違いに戸惑うことが多く見られた。また、唐辛子のきいた味付けのため水や茶が欲しいと言う生徒がほとんどであったが、授業の始めに教えた「チャジュセヨ」を言えた場合のみお茶を配って飲ませることにし、韓国語の勉強をしながらの和やかな試食会

となった。

〔唐辛子について〕

試食会のあと、味付けの主材料である唐辛子についての理解を深めるために、日本の唐辛子と韓国の唐辛子を味見し、日本のものが辛く、韓国のは辛さよりも色々な味がして味わい深いということを知ることができた。キムチについての学習では、唐辛子の日本からの伝播が16世紀で塩不足の18世紀に生まれたことを知り、キムチの歴史が古いものではないことが意外そうであった。また、キムチは、唐辛子の辛味（カプサイシン）による殺菌効果や酸味（乳酸発酵）により総合栄養食品であることを理解させることができた。

〔生徒の感想から〕

Hさん「韓国と日本での食の違いが印象深い。韓国人と日本人は欧米人に比べて顔が似ているから、キムチを食べる以外に違いはあまりないと思っていた。しかし韓国と日本では、反対といってよい程、食に関する礼儀が違っていた。この事を学ぶことによって韓国人との間が一步近づいたような気がした。食とは一番の基本であり、とても重要なことだと思う。異文化理解の第一歩ではなからうか。」

Mさん「キムチとおもちみたいなのは食べたこと、唐辛子を食べ比べたことが印象的だった。食事のマナーでは、日本と違うところが沢山あって自分達では当たり前と思っていたことが、国によってこんなに違うのかと思った。特に、韓国では食事を少し残すのが礼儀というのは、日本とは正反対なのでそっちでは気をつけようと思った。」

Fさん「韓国料理を食べたこと。美味しかったけどとても辛かった。食文化に触れるとともに韓国留学疑似体験？できた気がする。私は韓国の食文化になじめる自信はないが、他国へ行って溶け込むには、その国の食文化と仲良くすることが重要だと思う。」

授業を終えて

生活面として、食文化の日韓比較を体験的に理解する授業を組み立てたが、食文化の違いによる驚きが生徒にとって意外に大きく、生徒の韓国に対する興味関心が高まり、その後の授業への取り組みも積極的な姿勢が見られるようになった。今回、授業の中で食事の実体験を入れながら進めてきたが、実際には食事の時間に費やされることが多く、食習慣に対する考え方の違いまで深まらなかった部分もあった。1時間の中で生徒に体験させる部分と考えさせる部分をメリハリをつけて授業の流れをつくるのが今後の課題となった。また、日頃宗教についての関心の薄い生徒にとって宗教が生活面にどのように影響をあたえているかを考えさせる際、宗教の基本的な知識がないと、理解しずらく、断片的な理解だけに終わってしまう場合が見られた。異文化理解のベースとなる宗教についての基本的な知識を事前に学習する機会が

必要であった。

(文責 岡村 明)

### (3)英米グループ

「英米文化の背景を探る」

#### 1) 文化大使登場

グループ内活動でも、可能な限りの英米の文化大使を招待し、具体的事実をビデオや写真等活用して紹介するようにした。例えば、アメリカ文化についての授業では、アメリカ式の自己紹介を少し誇張した形で行ってもらいように招待したアメリカ人に依頼し、そのアメリカ的な特色を実際の自己紹介後、生徒に考えさせる活動を実施した。具体的なアメリカ人的要素として、アイコンタクト、握手、人と人との距離、話す姿勢や位置、顔の表情にその特徴を持たせたり、初対面で話題にする内容に関しては、家族の紹介や、ユーモア溢れる話題、自己主張や自分の意見の直接的な表明等を入れながら語ってもらった。

また、イギリス文化圏と考えられがちなアイルランドからの文化大使を招待した。自己紹介では、アイルランド人の名字の特徴としてのMc.やO'の由来や意味、洗礼名等を招待者の家族や親族、一族の絆、日本社会のコミュニティとの対比をしながら、豊かなコミュニティの繋がりを織り交ぜながら語ってもらった。

イギリスとは異質なアイリッシュ・ケルトを際立たせる企画も用意した。いわゆる「アイリッシュネス」理解を深めるような授業構成を試みた。例えば、アイルランド社会におけるパブの役割や、コミュニティの人々にとって豊かなコミュニケーションの場であることを招待者の経験から語ってもらった。

また、アイルランド特有のアイリッシュ・ミュージック、アイリッシュ・ダンス、妖精物語り、第一言語であるゲール語の詞的響きを語ってもらった。

それぞれの文化圏からの直接的な交流から生徒は、その文化に対する価値観、自国文化との相違点、同質性を認識していく。そのような印象を「アイルランド文化が一番印象に残っている。宗教的な事で追われ、そんな中でパブや音楽、ダンス、アイルランド語などの独自の文化を作り出していて、しかもその文化が、私にはとてもおだやかに感じられた・・・」(2C-YNさん)と記している。

#### 2) 映画にみる異文化理解

映画というメディアを異文化理解の素材として活用した。今回は特に日本と英米の比較が明確になる映画を選択した。具体的には、「ミスター・ベースボール」や「ガンホー」と言った映画の日英比較の典型的なシーンを通して、野球とBASEBALLの違いや野球というスポーツへのメンタリティーの日米の違いや、会社や組織への価

値観、忠誠心、個と集団の考え方、行動パターンの違い等を理解し、討論する機会を持った。

映画というメディアを利用した生活ベースの日米の違いについての討論を通して、「勤労観、野球の仕方、夫の仕事に対する妻の考え方などが描かれていて、日本とアメリカのモノの考え方にはこんなに違いがあるのだと大変おどろかされた。・・・このような文化摩擦をどうすれば少なくできるのか、どうすれば誤解を生まずにすむのか、その方法を考えてみたい」(2A-RSくん)と異文化から生じるコミュニケーションの問題を自ら問いかけ、考えていこうとする姿勢が生まれている。

#### 3) 異文化コミュニケーション論

上記2つの直接的な体験や活動を補う為に、主に2つのコミュニケーション理論を紹介した。例えば、ステレオタイプという概念の導入では、次のような質問から始めた。

世の中の理想的な人とは、「イギリス人のように料理が上手で、イタリア人のように自己抑制し、スペイン人のように働き者で、アメリカ人のように何か国語も話しロシア人のように酒を控えめに飲み、日本人のように個性にあふれる人である」という話をする。続けて上の記述をどう思うかと質問した。この記述に少しでも「おかしい」と感じた人は、その国に対して何らかのステレオタイプ的なイメージを持っていることになることを説明した。

その後、カテゴリー化 (Categorizing) という概念や、ステレオタイプ (Stereotype) (定型概念、紋切り型) という考え方の説明をした。

カテゴリー化とは、外的刺激を感覚・知覚し必要なものに意味付け (make sense) をしたのちに、別個の刺激をその同質性を基にグループ化する過程である。また、利点としては、記憶しやすく行動の予測が可能であるという説明をした。

ステレオタイプとは、他の社会・文化のメンバーについて、ある社会・文化のメンバーによって広範に受け入れられている固定的・画一的なイメージである。

このように人間の心理的機能として、ある対象に対してカテゴリー化、グループ化という行為をしてしまう。その行為が継続的、固定的になるとステレオタイプ化という現象が生じることを理解させる。次に、このようなステレオタイプから脱却するにはどうすればよいかを考えさせた。このような理論の気づきや理解を通して、異文化理解等で学習した国や民族にたいする固定的なイメージを自らの理解や判断で脱却し、国や民族を超えて「人」や「個」として異なる文化を持つ人を見ることの重要性を念頭に置いて指導した。

擬似的体験や直接的な体験を補う意味でのこのような理論の導入を、「人間のステレオタイプの話が一番興味深

かったです。自分の中で他人を消化して、よりよい関係を築こうとしていましたが、それは実は他人をイメージの枠の中に縛り付けるという行為だったのです。シンパシー（同情）やエンパシー（共感）なんて普通の授業では学べないし、そういう事を知って生活をするのと知らずに生活するのは違うのでしょうか。きっと、柔軟な考えになった方がいいよとドアを叩かれるような授業でした」（2C-KKさん）のように自分の中で意味づけをしている。

（文責 藤田高弘）

## 5. 3グループ合同授業

### (1) 「コミュニケーションワークショップ」

講師 野田真里先生（中部大学助教授）

日時 2003年5月27日（火）

内容の概要

#### 1. 世界の挨拶

タイ、フィリピン、イギリスの挨拶を実際に体験させる。その国特有の挨拶の仕方をロールプレイで体験することによって言葉によるコミュニケーション、言葉以外のコミュニケーションが文化背景により異なることを実感させた。コミュニケーションのパターンの多様性を確認したり、コミュニケーションの意味を再認識する意味で「国際コミュニケーション学」の授業のキックオフにふさわしい活動となった。

特に、タイでのお坊さんに向かってひざまづく行動は多くの生徒にとって衝撃的な挨拶だった。ほぼ土下座に近いその挨拶はあまりにも非日常的であり、その異質性を感じる機会となった。挨拶には、その文化特有の社会的、文化的背景があることや、文化的価値観があることを確認、再認識する良い機会となった。

#### 2. 名古屋・日本文化のこれってアタリマエ、ヘン？

言語、生活様式である文化圏では当然のことが他の文化圏では当然のことではないことを身近な経験から考え、気づかせる活動である。

名古屋弁の例として、「ケッタマシン」、「机をつる」等の独特の意味や表現を取り上げたり、名古屋独特の喫茶店文化である「モーニングサービス」の具体例を指摘した。また、日本人特有の宗教的態度として日本人は年末年始に3回宗教を変えるという指摘もあった。具体的には、12月24日にはキリスト教のクリスマスを祝い、12月31日には仏教徒の除夜の鐘で清め、1月1日には、神道の神社に出かけ初詣といった行動である。このような宗教に対する態度をキリスト教や、イスラム教の人たちはどのように見ているのか。また、そのような行動をとる日本人の文化的背景を考えさせた。今後、日本、韓国、英米の言語、生活、表現について学習を始めるよい導入となった。

#### 3. 筆談でサバイバル

言葉が通じない体験や、同じ文字を利用して言葉は異なる。そして意味が異なることをワークショップ形式で経験させた。同様の漢字という文字を使用しても、手紙はトイレットペーパー、豚は猪と表現することで生じるトラブルや意思疎通の困難さを経験を通して考えさせた。「同じ文字イコール同じ言語ではない」、「同じ民族イコール同じ国家ではない」という事実が、比較的均質な文化を持つ日本人にとっては盲点であり、また世界の現状であるという気づきにもつながった。

このワークショップ以後、各々の3グループが日本、韓国、英米の文化特有の言語、生活、表現を学習する動機付けを高めたり、方向性を確認する機会となり、まさにキックオフワークと言える活動となった。

### (2) 講演「イスラームと国際コミュニケーション」

講師 星山幸子先生（淑徳大学講師）

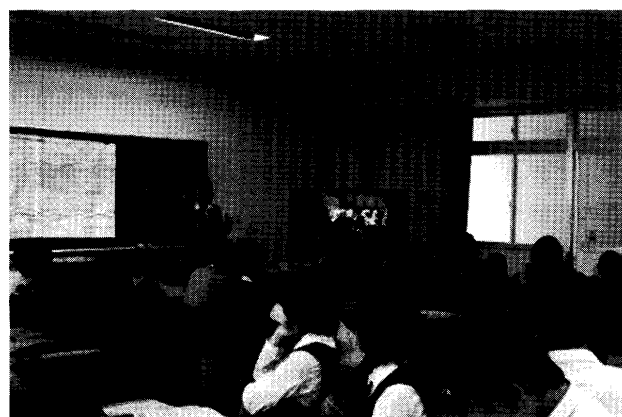
日時 2003年5月27日（火）

内容の概略

I はじめに

- 1 2001年9月11日の対米同時多発テロ以後
- 2 メディアにおける対立の構図
- 3 イスラームに対する理解の必要性

II ワorkshop 「ヴェール」着用は是非をめぐって



- 1 世俗主義国家トルコにおける女性のスカーフ着用
- 2 南東部アナトリア地方の女性会議で指摘された女性の地位に関する問題—学校教育とスカーフ—
- 3 南東部アナトリア地方における女性の地位を向上させるためには、小学校でのスカーフの着用をあなたは認めるべきだと思いますか

III 結論

- 1 西洋世界とイスラーム世界の対話の必要性
- 2 「日本文化」の見直し

参考資料

表1 トルコにおける男女識字率の推移（1950-1990年）—全国平均と南東部アナトリア地方との比較

図1 トルコにおける非識字率の推移

生徒の感想

・私も先生と同じで本当なら学校でのヴェール着用は認めるべきでないと思いました。「個人の自由だから個人の意思にまかせればいい」という意見がほとんどだけれど、個人がヴェールを着用するかどうかの判断をするその背景に問題があるはずで。女性の社会的立場が低い文化の中で、どこまで小学生の女の子の意見が尊重されるかも疑問であるし結局は(家父長制の)家の価値観での判断になると思います。つまり、その文化こそを問題視する必要があるはずで。

・小学校でのスカーフ着用問題は思ったより難しいものだった。認めることはよいことのように思えるが、慣習によって生活が無意識に縛られてしまう可能性は多いにあるし、今の決断は将来のイスラム国家での女性の在り方に大いに関わっていくことであると思う。だから、「自由にする」ということを安易に決定すべきではないと思う。

・ヴェールの話が印象的だった。男女差別と知って驚いた。「ヴェール」着用の是非の討論では本当に考えさせられた。

日本からは遠い存在であるイスラム文化の一端を「知り」、「考える」貴重な機会が与えられた講演であった。

### (3)交流会

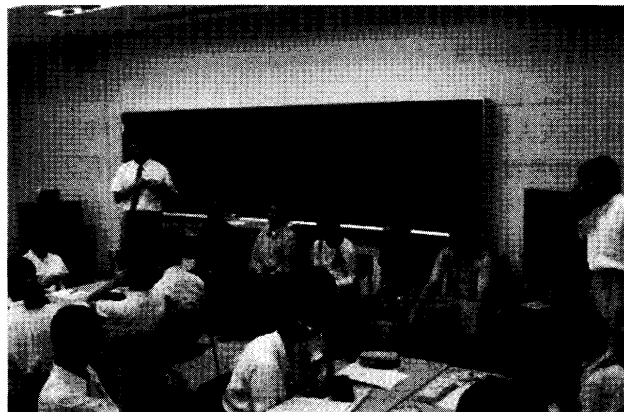
「留学生から見た、これってヘン?アタリマエ?」

講師 5名の留学生

日時 2003年6月27日(火)

内容の概略

各々のグループで日本、韓国、英米の文化に対する典型を学習してきた。その中でわいてきた様々な疑問や関心を確認する場を設けた。異文化学習ではその文化特有の典型を学習すればするほど、その文化に対するステレオタイプを持つ傾向になる。そこで、このステレオタイプを確認したり、修正したり、補足したりする機会にもした。また合わせ鏡として、日本文化が留学生にどのように映るかを理解する機会ともした。参加した留学生は、韓国、イスラム系インドネシア、インド系アメリカ、台湾系のアメリカ、イタリア系アメリカ、メキシコ系アメ



リカと多様な文化背景持つ人達であった。国家と民族が一致しないということが参加者の簡単な自己紹介だけでも分かるように配慮した。また、自己紹介では留学生からみた日本の生活習慣、言語、表現のここがヘンを語ってもらうようにした。そして、その疑問に生徒が日本人として答えるようにした。まさに異文化コミュニケーションが成立するように仕掛けを用意した。次に小グループに分かれ、これまで学習してきた、または日ごろ感じている韓国、英米、日本、イスラム文化についての疑問や関心を率直に留学生にぶつけたり、逆に留学生からの質問に答える小グループ討論会を実施した。

### (4)異文化理解の鍵は太陽光と地軸の傾き

「光、約23.4度の可能性」

講師 愛知県立芸術大学 神田每実先生

日時 2003年7月8日(火)

内容の概略

1 私たちの生活はどういう所で行われるのか。

スペインの最高のもてなし 暗い部屋

2 実験1 地球儀 自転 地軸 四季

実験2 太陽(光)の下で物はどのように見えるのか

3 スライド 地球上のいろいろな文化財

ものが立体的に見える表現 ポンペイの壁画

沈み浮き彫り1と2(太陽光線が当たる外壁などに使用)

4 光線の日射量に変化する 風土に培われるもの

風土の上で制作 エジプトの様式は3000年変わらない

日本の様式 雨期と乾期 平板 直線5kmが見える世界 知らず知らず刷り込まれている

僕らの育つ感性とは何か 地球は一つの文化

### (5)国際的NPO、NGOの活動紹介

「異文化にとけこむ、異文化を受け入れる

NGO「マハリカミッション」の多文化共生に向けての活動」

講師 大岡潤氏

日時 2003年7月15日(火)

内容の概略

1 私の半生と仕事について

2 「マハリカ・ミッション」設立の経緯と意味

3 これまでの活動

在日フィリピン人の生活を教会支援という形で支える。ネットワークをつくる。心の拠り所となる。語学支援をしたり身元引き受け人になったりする。土日は牧師さん。

4 フィリピンの食べもの・言葉・衣について

5 今後の活動

個人のアイデンティティを大切に。守る。継承していく必要がある。



## 6. アンケート結果

2003.9.30、授業最終日に新教科について、高2全員にアンケートを実施した。( )内の数字は質問に対して、肯定的な意見を選択した生徒の割合である。

1. 一つの授業に複数の教員が関わることにより、様々な視点から知識が得られると思う。(62%)
2. 学校外の先生の授業では経験的、専門的な知識が得られると思う。(82%)
3. 様々な問題が入り組んだ現代の社会問題に関する知識が得られたと思う。(57%)
4. 新教科で扱ったような「答えの出にくい問題」について学習することは大切だと思う。(81%)
5. 新教科で学習した問題に対して自分の意見や考えを持つようにしている。(69%)
6. 新教科で学習した知識を活用して自分の意見を組み立て、自分なりの考えを持つようにしている。(54%)
7. 一つの大きなテーマを3つのグループの視点から多角的に考えることができると思う。(50%)
8. 一つの課題を深く分析したり、幅広くまとめたりする機会になると思う。(67%)
9. 新教科の授業を通して、自分の教養が深く広くなると思う。(77%)
10. 新教科の学習が、これからの自分の進路選択や自分の生き方の助けになると思う。(34%)
11. 新教科で学んだことを現実の生活や社会で役立てようと思う。(52%)
12. 新教科で学んだことをこれから自分が直面する問題や社会問題を考える際に活用していこうと思う。(62%)
13. 新教科で学習した内容について自分の問題意識が高くなると思う。(52%)
14. 新教科の学習では知識のみでなく、体感することができ関連する事項への関心が高くなると思う。(39%)
15. 新教科で学習した内容に関連する既存の教科学習の内容も深く学ぶようになると思う。(25%)
16. 少人数で学習したため疑似体験など多様な活動ができると思う。(61%)
17. 新教科の学習を通して、学び方の多様性が身に付けられると思う。(55%)
18. 3つのグループの中から選べるのが意欲的に取り組むことにつながると思う。(52%)
19. 新教科で一つのテーマを詳しく学んだことが、既存の関連する教科(例、英語、国語)を意欲的に取り組むことにつながると思う。(21%)
20. 新教科で学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下したと思う。(20%)
21. 新教科は週1回では足りないので増やして欲しい。(12%)
22. 新教科を週1時間学ぶより他教科の学習がしたい。(24%)
23. 総合人間科より新教科のほうが、学習の目的がはっきりしていると思う。(19%)
24. 総合人間科の方が自分のペースで深く学習することができると思う。(63%)
25. 新教科は総合人間科以外の他教科より、友人や教員などの「人と学びあう」機会が多いと思う。(57%)

## 7. 結果考察

国際コミュニケーション学のアンケート結果で、約8割の生徒が肯定的な評価をした項目は「2学校外の先生の授業では経験的、専門的な知識が得られる 4新教科で扱ったような「答えの出にくい問題」について学習することは大切だ 9自分の教養が深く広くなる」の3項目である。約8割の生徒が「答えの出にくい問題」を考えたことで「自分の教養が深く広くなる」と思っていることがわかる。「自分の教養」の存在を意識することで生徒の何が変わるのだろうか。

次に5割から6割の肯定的な評価は多い。「1複数の教員が関わることにより、様々な視点から知識が得られる

3様々な問題が入り組んだ現代の社会問題に関する知識が得られた 5新教科で学習した問題に対して自分の意見や考えを持つようにしている 6新教科で学習した知識を活用して自分の意見を組み立て、自分なりの考えを持つ 7一つの大きなテーマを3つのグループの視点

から多角的に考える 8一つの課題を深く分析したり、幅広くまとめたりする機会になる 11現実の生活や社会で役立てよう 12自分が直面する問題や社会問題を考える際に活用していこう 13自分の問題意識が高くなる 16少人数で学習したため疑似体験など多様な活動ができる 17学び方の多様性が身に付けられる 18 3つのグループの中から選べるのが意欲的に取り組むことにつながる」の12項目である。授業に取り組む積極的な姿勢の現れでもある。

また、国際コミュニケーション学と他教科との比較では「25友人や教員などの「人と学びあう」機会が多い」と6割の生徒が評価をする一方で、「24総合人間科の方が自分のペースで深く学習できる」とする生徒が6割いる。これは国際コミュニケーション学には各グループの枠があることによるもので、他グループとの関連を意識するからである。

そして、国際コミュニケーション学の学習の目的がはっきり生徒に理解されているかについては「23総合人

間科より新教科のほうが、学習の目的がはっきりしている」は2割であることから言える事は、国際コミュニケーション学の最初の授業で定義し目標を提示しているにもかかわらず、生徒にはわかりにくかったようである。来年度への課題である。

最後に、既存教科との関係のみてみると「15新教科で学習した内容に関連する既存の教科学習の内容も深く学ぶようになる。19新教科で一つのテーマを詳しく学んだことが、既存の関連する教科(例、英語、国語)を意欲的に取り組むことにつながる。20他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下した。22他教科の学習がしたい」は2割である。既存教科との関連は低い。「21新教科は週1回では足りないので増やして欲しい。」は1割である。授業ではいつも「話し合いの時間が足りない」という生徒の声が毎回出るが、総時間数を増やしてほしいというわけではないことがわかる。

(文責 齊藤真子)

## 8. まとめと展望

新教科「国際コミュニケーション学」の一年目を終えた今、大きく3つの問題が明確になった。1つは、3グループの共通する知識を有機的に結びつけ深める仕掛がプログラム上に求められている。すなわち、縦軸の日本、韓国、英米の文化、横軸の言語・生活・表現といった共通の学習テーマを共通の知識として共有できる工夫がより必要ということである。

3グループ間の「知の共有」をより深める手法を考える必要がある。具体的には、日本語の特質や構造を学習したならば、同様に韓国語、英語の基本的特質や構造を全てのグループの生徒が系統的に学ぶ工夫が求められているということである。

2番目に、新教科と既存教科の何をどのように関連付けたり、連続性をもたせることができたのかを生徒の学習プロセスという視点から考察する必要がある。既存教科の枠組みではなぜ不可能なのか。既存教科を越えて融合する意味や、利点、問題点を明らかにする必要がある。カリキュラム全体の中での、新教科「国際コミュニケーション学」の位置づけを確認し、既存教科との学習内容の系統性を深く検討する必要がある。

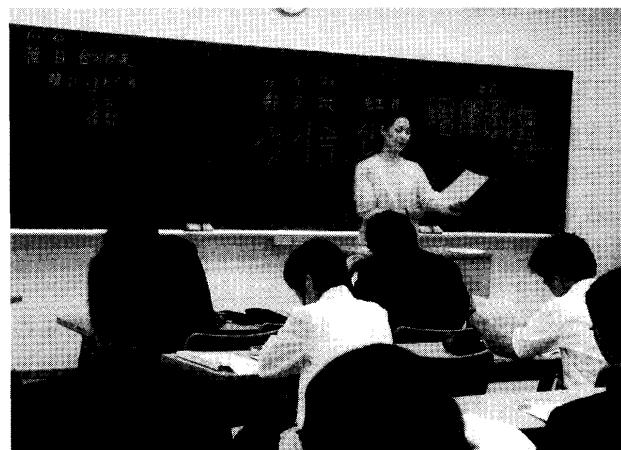
最後に、外部講師による直接的な体験や講義の導入法の問題である。外部講師による授業の前に、今までの学習と関連づけ生徒の意識や動機を高めたり、授業後に今までの学習内容と関連を持たせた十分な振り返りの時間を取り、クラス全体で共有する必要がある。今回は、盛りだくさんの外部リソースを活用することができたが、その反面、生徒にとって学習内容の消化不良となる側面があった。各グループと全体の学習の流れを熟慮し、前後の十分な準備と直後に十分な振り返りの時間を確保する。また、振り返りのスキルを高める必要がある。これ

らの3つの貴重な問題点を考慮し、来年度からの「国際コミュニケーション学」のシラバス改善、授業内容の改善へとつなげていきたい。

(文責 藤田高弘)



5/28 3グループ合同 留学生との合同交流会



5/14 日・韓合同授業 言語表現「ことわざ」